HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	韓国語一型アクセントの研究［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	崔, 鉉鎭
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12511号
Issue Date	2017-03-23
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/65371
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Choi_Hyunjin_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　崔　鉉　鎭

審査委員　主査　准教授　李　連　珠
副査　特任教授　小　野　芳　彦
副査　教　授　藤　田　健

学位論文題名
韓国語一型アクセントの研究

韓国語アクセントの研究は、従来日本の言語学におけるアクセント論の研究法に従うところが多く、中でもアクセントの対立を持っている慶尚道方言や 15 世紀から 16 世紀までの文献資料を元にした中期朝鮮語を対象にしたものが主流をなしている。一方で中期朝鮮語を前身とするソウル方言をはじめ、アクセントの対立を見せない多くの方言に関しては、アクセントの研究対象からは除外されており、その実態に関しても明らかにされていない点が多い。本研究は、このような韓国語アクセント研究史や問題点を背景にしているものであり、韓国語一型アクセントの研究が完成したこと自体が評価できるといえる。

本論文の特筆すべき研究成果に関しては、次の３つの点を取り上げることができる。先ずは、記述されている言語資料が信頼できるという点である。申請者は、記述言語学を行うには欠かせない音声学的素養を十分に身につけたうえ、自ら現地へ言語調査に出向き、アクセント資料の収集や記述を行ってきており、内省を持っている方言の資料でさえ入念な検討を行った。

次に、このような信頼できる資料を基に、音声学的事実から一歩踏み込んだ音韻論的解釈へまで論を引き上げている点が指摘できる。研究対象となった４つの方言のうち、チョンヤン方言は特に申請者が内省を持っている方言としてアクセントの対立を持たないということにいち早く気が付き、その音調型やアクセントの特性をどのように捉えるべきかについて絶えず労力を注いできたものである。当該方言には、音声的にアクセントの切れ目があることを特徴づけるような手がかりのない音調型が一般的に存在しているが、これらがアクセント体系上の一つの単位にはなれないという、解釈が容易でない音調型がある。申請者は、当該方言のアクセント単位の認定基準を設定することで、この現象を見事に解決している。アクセントの単位が６音節という一定の長さ以上になるとアクセントの切れ目が生じることと、その切れ目には、形態素の境界が関与するという形態音韻論的解釈も、従来は報告されたことのない興味深い成果の一つである。

最後に、本研究が韓国語アクセント研究史に寄与できるという点も重要な成果である。一型アクセントは、音声的実質が単純であるがゆえに、実際には揺れも多く、その解釈が容易でないともいえるが、韓国語全体のアクセント体系や特性を捉えるには当然不可欠な研究分野であり、本研究の成果が韓国語アクセント研究の進展にとって不可欠な存在になることが期待できる。

本論文の申請者は，既に国内外の学会において７件の研究発表を行っており，その成果を論文２編にまとめて発表している。また論文そのものの評価には現れにくい点であるが、極めて明晰な日本語で書かれていることも審査で高く評価された。これは日本語を母語としない申請者にとっては重要な点である。資料などにおいて細かい瑕疵が多々見られることが審査で指摘されたが、いずれもただちに修正可能なものであり、本論文の評価を大きく下げるものではない。

以上の審査結果に基づき，本審査委員会では全員一致して，本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいと判断した。